

の方法でメイプルを指板材として貼ったネックをオプションとして用意。その後1970年前後からはローズウッド指板とメイプル・ワンピースを選べるようになった。

ギブソンは当初からブラジリアン・ローズウッドを指板材として使用していたが、やはり1960年代半ばにインディアン・ローズウッドへと移行している。リッケンバックの指板材は、ローズウッドに比べるとかなり赤っぽいパドックであると思われる（写真3）。

またローズウッドなどの濃色材の場合は塗装しないのが普通だが、リッケンバックでは指板面にも塗装を施している。パドックの鮮やかな色は空気に触れていると徐々に暗い色に変化してしまうので、これを避けるために塗装しているとも考えられる。

木材資源の保護と新素材への期待

ワシントン条約によりブラジリアン・ローズウッドの国際取引が禁止されて久しいが、2017年からはそれ以外のローズウッド（学名的にはdalbergia属）もワシントン条約の附属書Ⅱに掲載され、木材だけでなく加工品（つまりベースも）についても国際間取引には許可が必要になってしまった。今後何らかの救済措置が講じられる可能性もあるが、木材資源の保護という観点から見ればやむを得ないのかもしれない。

このような流れの中で注目されているのが、他の木材からローズウッドやエボニーのような素材を作り出す技術だ。薄く削いだ木材を着色し積層することで作られるらしいが、詳しいことは明らかにされていない。以前よりフェノール樹脂などを指板に使った例はあったが、これらは完全に合成素材であった。

しかし新しい技術では材料が木材なので、質感も非常に自然で、本物のローズウッドやエボニーとの区別はなかなか付きにくいレベルである（写真4）。すでにいくつかの会社が製造しており、

採用しているギター・メーカーも多くなってきている。この後のさらなる進化に期待したい。

ヘッド部

ヘッドの形状と構造

ネックのヘッド部分の構造には、指板面に対して角度の付けられたタイプと、ヘッド面と指板面は平行だが段差が付けられているタイプ、それにヘッドがないタイプの3つがある（写真5、6、7）。

ヘッドがあるタイプでは、さらにマシンヘッドが2個ずつ左右に振り分けられたものと、片側に4個並んだもの、さらに3個1個などと変則的に振り分けられたものがある。多弦ベースの場合もこれに準ずるが、6弦以上の場合は片側にすべて並べるのは厳しい。

ギブソンの70年前後のベースには、クラシック・ギターのようなスロットッド・タイプもある（写真8）。ヘッド部の形状はデザイン的にメーカーの個性をアピールしやすい部分であり、ブランド・ロゴもヘッドに入られていることが多い。

弦楽器の歴史から見ると、角度付きのタイプが基本的スタイルであると言える。弦を支点であるナット部に強く押し付けるため、ヘッドに角度が付けられた。しかしこのタイプは材料の歩留まりが悪く、無駄が多いのでコストが掛かる。この問題をクリアするためにフェンダーは平行段付きヘッドのギター、テレキャスターをすでに生産していたので、プレジジョン・ベースにも当然それが採用された。この方法はヘッド全体に真っ直ぐに木目が通るので、強度的にも有利である。

弦がナットに押し付けられる力の点で有利な角度付きヘッドは、



写真5：指板面とヘッド面の角度は14~17°程度のものである。

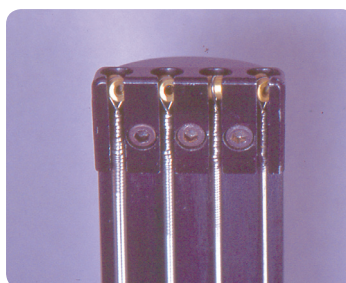


写真7：ネックの先端部には弦を固定するパーツが付いている。



写真6：指板面とヘッド面の段差は10~12mm程度のものである。



写真8：ヘッド全体の強度が落ちるので、あまりベース向きの方ではなさそうである。